616.831.4-085.832.9

人工冬眠療法の著效した間脳症候群を有する1例について

岡山大学医学部精神神経医学教室（主任：藤原高司教授）
清　水　英　詮

〔昭和30年6月20日受稿〕

1　緒　　言

最近Chlorpromazineによる人工冬眠療法が精神医学的領域に於て注目せられ，我が国に於ても其の臨床経験例が多数報告せられていることは周知の通りである．Chlorpromazineの效果は化学的ロボトミー（J. Delay），薬物学的ロボトミー（Lehmann）等と云われる如く，脳皮質間脳シナプシス阻止による上位中枢の可逆的機能停止をおこすためと云われていることから，私は Bychowski の所謂 Diencephalose などに対しては如何なる影響を与えるものであろうかと考えていたところ，たまたま間脳症候群を有する1例に遭遇し，Chlorpromazine 投与の経験を得たので報告する．

2　症　　例

永○房○　58才の女子　無職

家族歴：　母方の伯母に1名病名不詳の精神病に罹患した者がある外特記すべきことはない．

既往歴．　既往に著患を知らぬ．体格は細長型，病前性格は温順しく，小心，内気

現病歴．　昭和30年5月初頃より何等動機もなく，突然屋外を徘徊し，時には知人宅をふらりと訪ねたりすることがあり，徘徊中ふと我にかえり，帰宅することなどもあつた．徘徊時には話しかけてもろくに返事もせず，内容のわからぬ独語をしていることが多く，平静になつた時尋ねてみると，徘徊時の点々とした記憶はあるが，全体に対する記憶は判然としないと云つた状態であつた．こうした状態が1日の中2～3回見られる様になると共に，又異常に大食する様になつた．（1回に茶碗で4杯）上記の徘徊は回数，時間共に段々増加し，3週間後の5月20日には徘徊中河に転落，救けを求めていたのを附近の人が発見救助した．平静時其の事について尋ねても「どうして落ちたのか自分でもわからない．」と云い．自殺を企図したものでもなかつた様である．勿論痙攣発作の如きは認められなかつた．

初診時の所見　　昭和30年5月26日初診，初診時表情は快活であり，意識の溷濁はなく，問診に対して活潑に応答する．妄想，幻覚は認められず，徊徘時の体験について，「自分でもそれがわからないんです．ほつと気がついて，しまつたと思つて帰つてくるんです．」と述べ「最近苛々して変なんです，夜ねられないんです．」と訴える．疏通性はあるが記憶力稍々不良，指南力，判断力には異常を認めない．身体的には皮下脂肪少く，栄養は稍々衰え，体重35.5kg，脈搏80，体温36.5°C，視力障碍はない．複視，頭痛，多汗，動悸，唾液分泌過多，時に耳鳴等の自覚症状の外全身的に多毛を認める．瞳孔の対光反応はやゝ遅鈍の外異常なく，舌は湿潤し，軽く振顫，唾液の分泌過多が認められる．膝蓋腱反射，アキレス腱反射何れも左右共に消失，腹壁反射に著変なく，其の他運動知覚神経の異常は認められない．尿所見血液所見共に異常なく，エオジン嗜好細胞の増加はなかつた．血清カルシウム量は 9.3mg%，血糖のアドレナリ

指導　高坂睦年助教授

ン負荷試験は正常，Thorn の試験は 40.9% 減で陽性，脳波所見では全誘導に於て正常な α 波を缺き18サイクル内外の速波が認められる．ルンバールを行つた結果，液圧は122mm 水柱（横臥位），無色透明，ノンネ，パンディー何れも陰性，気脳術を実施するに第3脳室の拡大及び脳皮質全般に亘る軽度の萎縮が認められた．以上の所見を総合して，間脳－下垂体系に於ける Bychowski の所謂 Diencephalose と考えた．

経過： 入院後間もなく朦朧状態が始まり，Chlorpromazine 投与をはじめた．（別図は症状と投薬の関係を示す．）即ち1日25mg の内服より漸次増量，7日後には 150mg，2週間後には 200mg，7月1日には最高 250mgに達した．結果は別表の如く，1日3～4回長きは数時間に及んだ朦朧状態も，漸次回数，時間共に減少し7月3日以後には朦朧状態も見られない様になつた．又唾液分泌過多，多汗も解消し，多食も7月に至つて正常に復した．この様な著明な効果を收めたので，7月7日より漸次減量をはじめ，7月16日一応 Chlorpromazine の投与を中止，状態を観察することとした．其の後8月7日迄は，意識障碍，食欲の異常，其の他の身体的症状も見られず，全く常人の如き観を呈した．然るに8月8日より，意識障碍はなかつたが，唾液分泌過多，時に異常な発汗が見られる様になつたので，8月12日より再び Chlorpromazine の投与をはじめたが，その結果，症状は漸次消失，8月23日よりは短時間の朦朧状態が1日2～3回起る程度になり，更に Chlorpromazine を増量投与したところ，症状は8月末に至り全く解消するに至つた．

3 総 括

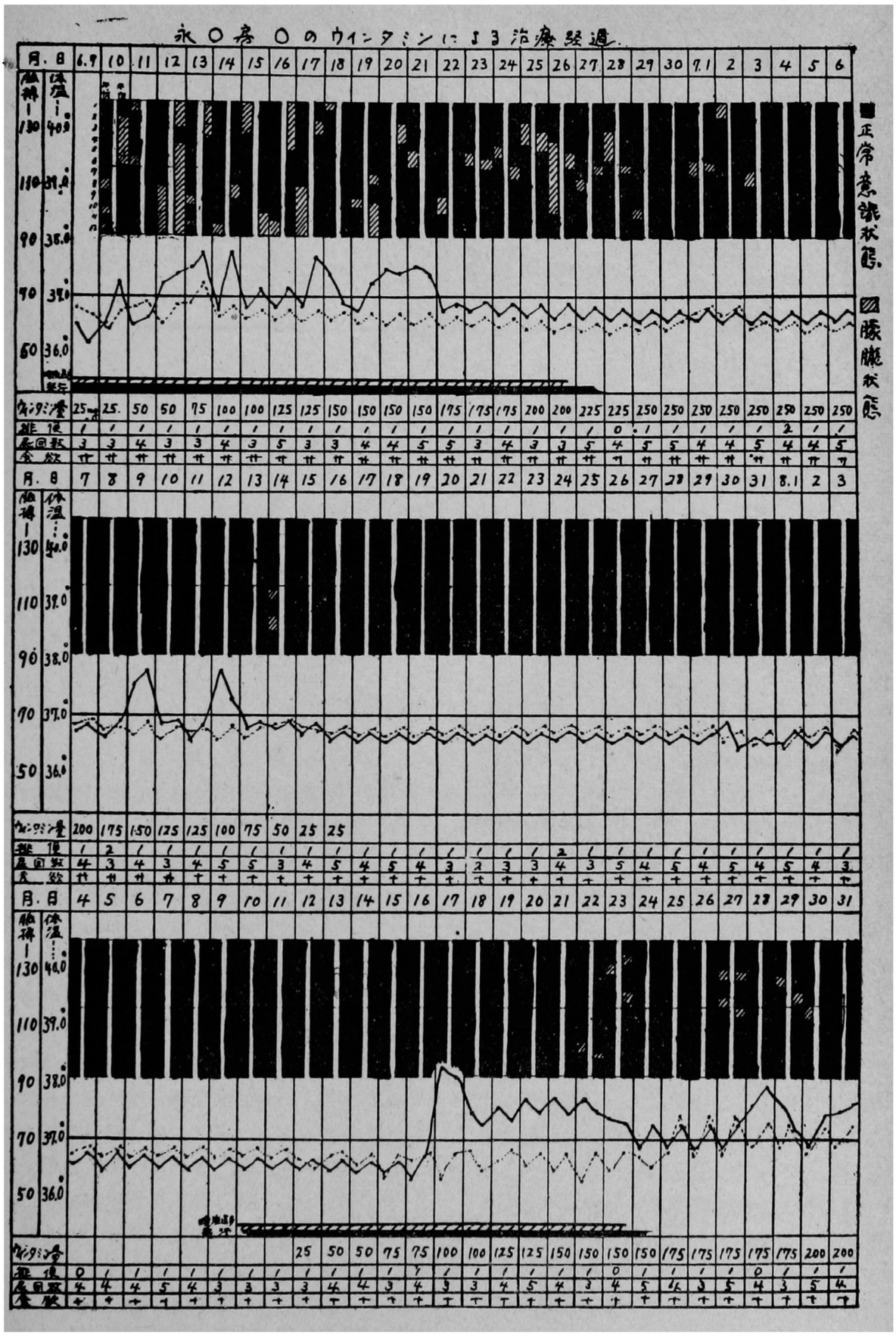
Chlorpromazine 投与が第3脳室の拡大を有し，多汗，多食，意識の溷濁等間脳症候を有する患者に效果をおさめたのは何故であろうか．Chlorpromazine を投与していると，屢々著明なパルキンソニスムス様の症状を呈してくるし，又アテトーゼ症候群の際に見られる，"abnorme Fremde Reflexe"（Duensing）に酷似した筋攣縮状態を惹起することも稀ならず体験する処のものである．これらの症状が Pallidum, Caudatum, Thalmus, Nigra, Luysi, Ruber, Bindearm その上位たる皮質運動野，前運動領野等が浸襲せられた時に起ることは周知の通りであるが，Chlorpomazine はこれ等の部分と皮質間のシナプシスを遮断するのが主体か，これ等の核其のものに働いてそれを麻痺せしめるのであろうかと云う問題は不明である．或る場合はパルキンソンニスムス様症状を起し，或る場合は間脳症状を鎮静させるものとするならば，畢竟それは作用起点の相異と，個体の耐性に依るものとの相互的関係によつて定まるものと考えられるであろう．ともあれ本症例は皮質一間脳シナプシスの遮断に依る鎮静作用に対するに Chlorpromazine の中枢神経節そのものに対する直達的な働きが指唆せられて面白いと考えられる．

結 語

58才の女子で意識障碍，多汗，多食，多毛等間脳症候群を呈した患者に Chlorpromazine を使用した所著效を奏したので報告した．

主 要 文 献

1) 石橋俊実：間脳の機能と臨床，医学書院 1954.
2) Bychowski : Über Diencepharen, Nervenarzt Heft 3, 113, 1938.
3) Lehman, H. E.: Nervenarzt Heft 8, 20, 1954.
4) Lehman, H. E. & C. E. Hanrahan, Arch. Neurol. Psychiat. 71, 227, 1954.
5) Delay, J., P. Deniker & J. M. Harl. : Ann. méd. psychol. 110(2,1) 12, 1952, Duensing, F. Pathologische Fremdreflexe bei Erkrankungen des extrapyramidal-motorische Systems. Leipzig 1940.


永○喜○のウインタミンによる治療経過
月・日
脈搏
体温
ウインタミン量
排便
尿回数
食欲
正常意識状態
朦朧状態